

琉球大学学術リポジトリ

戸惑う占い師

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: ja 出版者: 琉球大学国際地域創造学部国際言語文化プログラム 公開日: 2023-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ホセ, マリア メリーノ, 鈴木, 正士 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24564/0002019726 |

戸惑う占い師

ホセ・マリア・メリーノ著
鈴木正士訳

〈翻 訳〉

戸惑う占い師

ホセ・マリア・メリーノ著

鈴木正士訳

「おじいちゃんは115歳なんだよ」家族のものにそう言われると、ホセはいつも興味なさそうに肩をすくめた。大勢いる老いた息子や娘それに孫たちと、自分の年齢について争いたくなかったのだ。孫といっても、すでに中年となった彼らには成人した娘や息子がいたし、ひ孫たちもそれぞれ家庭を持っていた。そしてひ孫は子供が生まれると、ひいおじいさんに名前をつけてもらったり初聖体式に頭の上に手を置いてもらったりしようと、ホセのもとに我が子^{おもひ}を連れてきた。

一族は多産で子供がふえていったので、母屋のまわりには年々離れが建て増しされた。そのため、ひと気のない静かだった田舎はどこまでも家の連なるにぎやかな集落へと変貌を遂げた。押しつけられた年齢を受け入れたように、自分にはこの四世代の家族しかいないこともホセは受け入れた。

しかし時おり彼は、自分は連綿とつづくある一族の末裔ではないかと思うことがあった。が、判然とはしなかったので、しまいには深く考えることをやめ、覚えているかぎりのぼんやりとした記憶と現在の状況をつなぎあわせ、自分の年齢や環境の変化を認めることにしていた。

ファラオの称号が代々の王に継承されていることは知っていた。そして、屋敷の周辺の変貌ぶり、たとえば、きらびやかな乗り物が速度を上げて道を行きかうようになっていたり、湿地帯が干拓されて農地になったり、また大型化した船がけたたましい音をたてて川を航行するようになっていたりしたことも知っていた。しかしホセは自分の正確な年齢はわからなかった。

ともかく自分が相当高齢であることは自覚していた。年のせいで、身体のあちこちにガタがきていることも仕方なしに受け入れた。手足の冷えはますますつのり、毎朝浴びるエジプトの強い光でさえやわらげてはくれなかった。そのため、イスラム神ヤーベが彼の功績の数々に与えた贈り物は、少しずつ自由がきかなくなっていく不快感ばかりの長寿かもしれないと考えるようになった。

錯綜した時間が緩慢に流れるようになった今、失って一番惜しいとホセが感じているものは、若かった頃の正確な視力だった。時間の経過とともに、瞳に映る物の形を画像にすることが困難になり、すべてが混濁して見えた。明暗が曖昧になり色彩が解体された世界で、彼は呆けたひとのように混乱し、寄り辺ない気分になった。音や声、匂い、熱風や冷気によってしか物を識別することはできなかった。

ぼんやりとした塊のようなものに注意を引かれると、ホセは両方の手で軽くこぶしを握り、指と手のひらのあいだにほんの少しすきまを作った。それを目のところまで持っていき、そのふたつの穴から、衰えた視力のピントを合わせようとした。しばらくすると、それははるか遠く土煙のなか前進してくる家畜の群れや、すぐそばにいる見も知らない訪問客の顔だとわかった。こんなふうにして、ホセはその朝、屋敷の裏にある果樹園の端に植わった、大きないちじくの木の下に、じっと動かずにいる人影をみつけた。

ホセは女中を呼んだが、女中たちは大麦を脱穀していたので、駆けつけてきたのは遠縁の若い二人の娘だった。二人の仕事は、ホセの身体を拭いたり服を洗ったり食事の支度をしたりすること、そして彼とベッドを共にすることだった。もちろんホセは厄介な欲望からはどうも解放されていた。しかし年齢となっても彼は若い娘と寝ることを好んだ。二人の身体に触れたり、眠れない長い夜、若さの特権である静かな深い眠りを、すぐそばで感じていたいからだった。

ホセは二人の娘に、イチジクの木の下に何がいるか尋ねた。一頭のらくだが見える、そして、葉の茂った木陰に男がひとりいる、と二人は答えた。ホセは黙り込み、しばらくしてから娘たちに家事に戻るよう身ぶりで指図すると、太陽に顔を向け、息をめぐらせた。ラクダのそばにいる男はなにか夢を見たのかもしれない、とホセは思った。

自分の見た夢を気に病みホセに夢を占ってもらおうと、多くのものが訪ねてきた。彼らは畏怖の念から震えながらやってくると、持参した捧げ物をホセの足もとに置いた。それは小さな袋に入ったアーモンドの実だったり、小箱に入った塩漬け魚や壺入りの蜂蜜だったり、イチジクパンやスギの油や手足を縛られた子ヤギだったりした。

まだ目がよく見えていたとき、ホセは話しかける前に、やってきたものをじっくり観察した。訪問客を迎えることに慣れるにしたがい、顔を見れば彼らを悩ませている夢が何であるかわかるようになった。夢の内容は、群がっている昆虫だったり、死んだ大量の魚だったり、影の中の影だったり、くずれていく砂の彫像だったりした。

時々同じ夢を、同じ境遇にあるもの——夫を亡くしたばかりの妻や告訴されている律法学者や世襲できなかった貴族——が見ることがあったものの、夢というものは境

遇に関係なく誰もが見るものであり、子供の産めない若い女と凱旋將軍とどこにでもいる奴隷が同じ悪夢を見ることもあるとホセは知った。

ホセの年齢を115歳だと信じたように、人々は、彼は神ヤーベから夢を解き明かして未来を占う能力を賦与されたと信じていた。しかし、ホセはこのことについても知らんふりを決め込んでいた。ヤーベの栄光とホセ一族の顕彰のために、自分の話が村の年代記に記されていることをホセは知っていた。そのなかで彼は、若い頃自分が見た夢に、彼を半殺しの目にあわせた嫉妬深い兄たちを彼自身が助け、繁栄を築くという運命を占っていた。

しかし、今では伝説と化したその事件を子や孫から話してくれと言われると、ホセはまごついた。生まれてこのかた自分が見た夢のひとつも思い出せなかったからだ。ともかく夢占いによって、彼は代々のファラオの宰相として権勢を誇ったあげく、たくさんの奴隷や数多くの家畜や広大な耕作地を所有し宏壮な屋敷に暮らす主人に成り上がったのだった。ところがホセは、自分が夢を占えるなどとは思っていなかった。

実は、ホセは二つの秘密を心の中に隠していた。ひとつは、若い頃に見たといわれる、彼の長い遍歴を引き起こすきっかけとなった夢を彼は見てはいなかった、ということである。

夢をでっちあげたとき、そこには最初たわいの遊び心しかなかった。敵意に満ちた兄たちの嫌がらせに対しての仕返しだった。

ホセの兄弟はみな母親が異なったため、一族のなかで争いや対立の火種を抱えていた。ところが彼らは、ホセに対する憎悪を軸としてきつく巻かれた束のように固く結束していた。兄たちはホセを除け者にし、彼が孤立するよう躍起になった。そうすることで兄弟間のいざこざを回避していたのだ。ホセを共通の標的にしなかったら、年老いた父親がホセの身代わりになっていたことだろう。父親はホセに特別に愛情を注いでいたのだ。

父親が兄のだれよりも自分をかawaiiがってくれることがホセはひどく嬉しかったし、また誇りに感じた。それは彼の自信にもなった。父親の愛情に報いるため、農場で起こったさまざまな問題を彼が知っているかぎりの明白な証拠を示して父親に教えようと思った。それは兄たちの怠惰や不正を告発することになるものだった。が一方で、仲間外れにされ独りで羊を放牧していた毎日、憎悪のこもったかげ口をたたき彼らにからかい半分で思い知らせてやる方法はないものかと、ホセは知恵をしぼっていた。

兄たちに仕返ししてやろうと考えたのが、夢をでっちあげようと思いついたきっかけだったのだ。その夢は象徴的ではあるものの、明らかに兄たちが彼にひれ伏す内容の夢だった。彼らに彼が創作した夢を冗談まじりに語ると、彼らは屈辱に震え、それまでホセに抱いていた憎しみは頂点に達した。夢占いができると言った自分に対する

憎悪で兄弟はひとつに団結したとホセは気づいた。

そして、ホセが心の底にしまって誰にも明かさなかつたもうひとつの秘密とは、彼の夢占いはいかげんな勘やその場かぎりの思いつきによってなされている、ということだった。彼はひとが見た夢を堂々と占っていたが、実は彼には、言葉では表わされていない前兆を解き明かしているという自信はまったくなかつた。ところがどういうわけか、彼が占ったことはその直後、すべて現実のものとなった。そのため誰もが、彼の夢占いは正真正銘だと信じるようになった。

ホセは神ヤーベから夢を占えるという特別な恩寵にあずかっていると人々は思ったのだ。しかし、彼の夢占いの発端は兄たちを辱めるために思いついた遊戯であり、予言の言葉は彼らに対する悪口だった。そのため、いつか真実が露顕するのではないかとホセは恐れ、長いあいだ心が休まることはなかつた。

ファラオの給仕役と料理役が失策を犯し投獄された。ホセもまたプティファル將軍の老婦人の計略にはまり投獄された。彼女はホセを將軍の財産管理の重職から引き離すと、自分の一族のものをその職につかせた。その陰謀はホセが彼女の求愛にこたえないことへの報復だといくら噂されても、彼女は意に介しなかつた。給仕役や料理役と同じ牢獄にいるあいだ、二人は顔つきや言葉遣いなど表面的な様子は似かよっているにもかかわらず、運勢はまったく反対だとホセは思った。それは生まれ落ちたときからの宿命であり、意味あり気に口ごもるときや、歩く時の足の運び方と肩の動かし方と視線の向け方の違いに刻印されていると感じた。

給仕役と料理役は、彼らをひどく動揺させた奇妙な夢を見たとき、それをほかの囚人に話した。夢の内容を聞いて驚いた囚人が一様に黙りこんでいるあいだ、ホセは、給仕役が見たという、ファラオに盃を捧げる夢は給仕役の生を意味していると、料理役が見たという、鳥に頭をついばまれる夢は料理役の死を意味していると思った。

ホセの夢判断はその場かぎりの思いつきであり、直感に過ぎなかつた。実は給仕役の夢の解釈には給仕役に対するホセの愛情が反映していた。給仕役は不運な目にあっても、どこことなく根っからの穏やかさが感じられた。一方、料理役にはホセは嫌悪感を抱いていた。投獄されても料理役は威圧的な態度を変えることはなく、残酷さがにじみ出していたのだ。

語り伝えられているほどには、正反対の運命をホセは言明したわけではなかつた。しかし、夢の内容をよりよく理解してもらうため、表現に気を配りながら、給仕役の夢の象徴として昼を持ち出す一方、料理役の夢を夜にととえた。そのため、ファラオが給仕役を復権させ料理役を処刑したとき、ホセの予言は正しかったとだれもが思った。生き残った給仕役は、とりわけ仲間の痛ましい最期を知ったとき、未来を占うホセの能力に舌を巻いた。あとあとまでホセの夢判断を忘れることはなかつた。そして、王ファラオは牛と麦の穂の夢を見た。

それ以来、ホセはファラオの夢やそのほか多くの人々、貴族から下っ端役人が見る夢を占うようになった。

ファラオの夢は一番単純だった。太った牛と実った麦の穂の夢は豊作を、やせた牛と実りの薄い麦の穂は不作を示している、そして晴れやかな鳥の飛翔と固い大地の夢は繁栄の時代を、重たげな飛翔と大洪水の夢は窮乏の時代を示している、と彼は占った。ホセはファラオの夢判断には自信があった。

だが、多くの場合、夢は複雑で謎に満ちており、不可解でさえあった。しかし結果的にホセの夢占いは、いつも正確な託宣となった。

ところがホセ自身は子供の時から夢を見たことは一度もなかった。そのため彼は、夢というものにいたく興味を引かれた。

夢を見るとはどういうことだろうか？ ひとはどうして夢を見るのだろうか？ 夢のなかにどんなふうにして人物や動物、場所や物体は現れるのだろうか？ 立体感や色彩や距離はどのように表わされるのだろうか？ 夢のなかで熱や痛みをひとはどうやって感じるのだろうか？ 夢の空間はどこで生まれるのだろうか？ 夢のなかの時間と眠っている時間はなぜ一致しないのだろうか？ どのようにして夢は始まるのだろうか？ 夢のなかにはほかの夢が現れることはないのだろうか？

ある種の食べ物、たとえば果汁の多い果物やビールかす、煎じた葉草などを食べたり飲んだりすれば、ひとは眠りについたあと、触れることのできないその秘密の世界に入り込むことができると、次第にホセはわかってきた。夢の解釈を求めてやって来るものが彼に教えたのだ。しかし、ホセはそれらの食べ物や飲み物を口にしても、偏頭痛や消化不良に苦しんだだけだった。結局、ヤーベは自分に夢を見る能力は与えてくれなかったと結論づけ、ホセは夢を見ることをあきらめた。

夢を見ないまま、ホセの長い人生は過ぎていった。そのあいだ、占い師として有名になっていたホセのもとに、悩みを抱えたものが、自分たちの見た夢の錯綜とした映像に何が記されているのか解き明かしてもらおうと、遠い道のりをやって来た。彼らをとおしてホセは、夢という闇の世界の証人となる特権を与えられたが、彼自身は昼の世界と眠れない夜の世界しか知らなかった。

数日が過ぎた。毎朝ホセは両手のこぶしで作ったすき間から男を覗いた。男とラクダはずっとイチジクの木の下にいた。イチジクの木の植わっている果樹園は唐突に終わり、その先には川までつづく堀があった。

男の存在に気づいてから5日目、ホセは召使いのひとりを呼び、男についてなにか知っているかと尋ねると、召使いは、川岸に生えている草をラクダが食^はんでいるあいだ、アラビア人のその男は一日の大半を眠って過ごしていると答えた。ホセは、ここ

にやって来たわけを男が誰かに話したか気にかかった。男は一言もしゃべらない、なにか病気なのか、それとも、ひもじいのかと、食べ物を与えたり言葉をかけたりしたが、感謝の素振りも見せなかった、と召使いは言った。

自分になにかを伝えるために男はここにやって来たのだとホセは直感した。しかしなんらかの理由で伝えられずにいるのだ。ホセの心は騒いだ。すでに燃え尽きたと思っていろいろな思いが、老齢のために失われていくそのほかの感情とともに、彼の心によみがえった。そのため毎晩、裏庭の門まで行くと、男がいるはずの暗闇に混濁した瞳を向けた。

数日後、不安な気持ちに耐えられなくなったホセは、男の所に自分を連れて行くよう奴隷に命じた。奴隷たちはホセを椅子つきの輿こしに乗せると、何本もの大きな日傘をホセの上にかざしながらイチジクの木いちじくの生えている場所まで運んで行った。

男は青いむしろの上にすわってナツメヤシを食べていた。ホセは奴隷に向かって、ナツメヤシを食べ終えたらそばまで来るよう男に伝えるよう、命じた。

しばらくすると耳もとで、名前と生まれ故郷をうやうやしく名乗る男の声が聞こえた。この場所にいつづける理由をホセが尋ねると、男は押しえつけるようなくぐもった声で、それは自分の意志ではなく、もつやく何度も見た夢のなかのお告げによるものだ、夢のせいで、エジプト産の乳香、樹脂、没薬を運ぶ隊商から離脱し、夢で見た道を夜通し歩いてイチジクいちじくの木の生えているこの場所にたどりついたのだ、と言った。さらに、夢のなかでこのイチジクいちじくの木とまったく同じイチジクいちじくの木の横に、水を張った天水井戸があるのを見た、水は徐々に減っていき、井戸が空になり水のしづく一滴まで乾き切ったとき、井戸の底の真ん中から突然血が噴き出した、と男は言った。

ホセは夢の内容に戸惑った。はじめてのことだった。なんと言ってもよいかわからなかった。そして、どれくらいいのあいだここに滞在するつもりかと男に尋ねたとき、ホセの舌はもつれた。男の声がした。驚いたことに、それまで不安げだった声は落ち着きを取り戻し、喜びで震えていた。男はこう言った。すぐに立ち去るつもりです。あなた様に不可思議な夢やここまでの長旅の話をして肩の荷が下り、虫の知らせも感じなくなりました。解放された気分です。明日の夜明けに出発して隊商に戻ろうと思います。

動揺が静まらぬままホセは、自分を家に連れ帰るよう奴隷に命じた。部屋でひとりになると、その日は一日中、男が見たと**言った夢を解き明かそうと思案をめぐらせた**。その夜、ホセは生まれて初めて夢を見た。

夢のなかで、ホセは父親の所有する羊を放牧させる若者だった。父親の指示で、兄弟たちの仕事を見届けるためドタンに向かっていた。朝の光は、眠れない夜に灯す明かりとはくらべものにならないほど澄み切っていた。丘の牧草地は初夏の日ざしを浴び

てきらめき、小道のわきに生えている茨の茂みは彼が嗅いだことのない強い匂いを放っていた。

ホセは父親からもらった色鮮やかな上着をすでに脱いでいた。暑さがじつりと身体にまとわりついてきた。この暑苦しさを夢ではなく現実に体験したら、とても耐えられないだろうと思った。

そのあと、ホセの記憶に生々しく残っている——おそらく逃れられない不運な結末が待っているだろう——事件が夢のなかでふたたび起こった。兄たちが身をひそめていた場所に近づくと、彼らは彼に襲いかかった。うつろな目をして手に小刀を握っていた。猛り狂った牧羊犬はみな羊のことなど忘れてうなり、互いの身体に噛みついていた。

夢のなかでも長兄のルベンが弟たちに、ホセの血を流してはならないと命じていた。兄弟のあいだで言い争いが生じたあと、ホセは衣服を剥ぎ取られ、乱暴に山の下に引きずられていくと、水の涸れた天水井戸に投げ込まれた。井戸の底にたたきつけられ、ホセは気を失った。

しばらくして意識が戻っても、朦朧としたまま自分がどこにいるのか分からなかった。彼の脳裏に、長寿の族長として波乱の人生を生きているという夢が、鮮明な映像と明確な感情をともなって残存していたからだ。しかし、やがて彼は、どんな目に遭ったか思い出した。そして強い日ざしのもと時間が経過し、のどの渇きが耐えがたいものになったとき、兄たちは手を汚さずに自分を殺そうとしているのだと気づき、戦慄した。

太陽が西に傾きやっど日陰ができた。それはなによりの救いだった。ホセは井戸の壁にもたれると、身体に触れる石を墓石のようだと思いながら眠りに沈んだ。

目が覚めた。横で眠っている二人の娘は、讃美歌を合唱しているかのように深い寝息をたてていた。滝のような汗をかいていたにもかかわらず、ホセはものすごい悪寒で激しく震えていた。先ほどまで見ていた夢が生々しく思い出された。事件の起こった場所、人の話す声や犬のうなる声、やみくもに抵抗したことや縛りつけられたときの激しい痛み、口に入った砂粒のざらついた感触や土ぼこりのたつ深い穴に突き落とされたこと、そして焼けつくような太陽の光と喉の渇きとひりひりと痛む傷跡が。

夜は明けようとしていた。まだ闇に包まれていたが、朝の到来を告げるあひるの鳴き声が聞こえたあと、すぐに雄鶏のとこのこの聲とその日最初に聞く人の声が遠くから途切れ途切れにホセの耳に届いた。不意にホセはある思いにかられた。夢の世界は自分が今いる、この現実世界と変わらないのではないのか。夢の中でも現実世界のように、唯一の明白な真理と考えられる時間が流れているのではないのか。

その瞬間ホセは、これまで大きな思い違いをしていたことに気づいた。起き上がる

と、眠っていた二人の娘をおびえさせるほどのものすごい叫び声をあげた。驚いた家族や召使いが寝室に飛び込んできた。

「あの男を連れ戻せ」ホセは叫んだ。命令を聞いて屋敷から飛び出した召使いの声が聞こえなくなるまで、ホセは叫びつづけた。そして戻ってきた召使いが、男はすでに出発してしまったと告げると、「見つかるのだ」と言った。そしてもう一度大きな声をあげた。「見つけろ。連れ戻せ。命に代えてもだ」

正午、男は連れ戻された。男の声は初対面のときと同じ、くぐもった疲れた声だったが、今度はそこに恐怖がうかがわれた。ホセは恐怖心を取り除こうと、男にまず食べ物と飲み物を与えるよう、召使いに命じた。男が落ち着きを取りもどしたようにみえたので、無理やり連れ戻したことを詫言ると、夢で見た天水井戸についてもう一度話してくれるよう頼んだ。

男はホセから言われたとおり天水井戸について話した。男が語り終えたとき、ホセは銀貨 20 枚の入った袋を男に与えるよう召使いに命じると、重々しい態度で男にこう語りかけた。ただちに街道に戻るのだ。隊商を見つけたら、先導役にドタンへ向かってくれるよう頼むこと。やがて丘の北斜面に生えているまばらな木立のなかに、羊を放牧している牧夫たちを目にするだろう。いいか、牧夫が売りたいがっている奴隷をこの銀貨 20 枚で買うのだ。

砂漠から出た最初の夜だった。その夢は妙に生々しかったので、わたしは怖気をふるっていた。すぐにわたしは、自分が見た夢を先導役に話しに行った。牧夫たちがいると夢のなかで告げられていた場所に行くことを先導役は承知してくれた。そこは街道からほんの少しはずれたところだった。

わたしは最初、いくつかの丘に散らばっていた羊の群れを目にした。そして灌木の陰に身を寄せ合っているヘブライ人の牧夫を見つけた。そのうちの二人がわたしたちに近づいてきて挨拶をすると、ミルクと数枚の毛布と木製のさじ数本を差し出しながら、若い奴隷もひとり売りたいのだが、と言った。

そのとき、わたしの見た夢は天からのお告げだったのだと合点がてんした。そこで彼らに奴隷を見せてくれと頼んだ。彼らは水の涸れた天水井戸にわたしを連れて行った。

井戸の底で倒れていた奴隷の男は太陽に身体は焼かれ、たしかに力尽きてはいたが、姿形は良かった。牧夫たちは彼を天水井戸から引っぱり上げた。ひどい状態だったが、思ったとおり、やはり彼は健康でたくましい若者だった。

値段がこの奴隷に見合うものなら彼を買いたいとわたしは彼らに言った。交渉した結果、夢のなかであらかじめ決定されていた銀貨 20 枚で手を打つことに彼らは同意した。この程度の奴隷に対してそれは悪い価格ではない。

傷の手当てをして食べ物や飲み物をやるようわたしは牧夫に命じた。エジプトに到

着するとすぐ、プティファル將軍家のものが奴隷をわたしから買い取った。わたしにとっては願ってもないけっこうな値段だった。

あなたたちはもうこの奴隷の行く末を知っている。ヘブライ人のこの若者が時の経過とともにどのように豊かになり、代々のファラオの時代、権勢を誇るに至ったかということ。

すべては、わたしたちの夢のなかに描かれているのである。そしてわたしたち自身は、眠れる不死の人が見る夢のなかに蠢く束の間の^{うごめ}つか^まの形象に過ぎないのだ。

解説

本作『戸惑う占い師』は、旧約聖書の『創世記』最終箇所(第37章～第50章)に記されている、いわゆる「ヨセフの物語」を下敷きにしてホセ・マリア・メリーノが創作した、ボルヘスの詩文集『創造者』(1960)へのオマージュ的作品だと考えられる。

父ヤコブから兄弟でいちばん愛されていたヨセフは、兄たちの嫉妬を買い奴隷としてエジプトに売られるが、そこで宰相にまで出世する「ヨセフの物語」は、多くの芸術家の創作意欲を刺激した。絵画や音楽などのほか、文学においてはトーマス・マンの『ヨセフとその兄弟たち』四部作(1933-43)が、「ヨセフの物語」の影響を強く受けた作品として有名である。ここでマンは「ヨセフにおいて生と精神との対立を調和的に止揚した人間の理想像を描き、人生を祝福している」。(『新潮世界文学辞典』)

『創世記』の「ヨセフの物語」とは次のような内容である。

アダムとエバの子孫である、アブラハムの子イサクから生まれたヤコブの子ヨセフは、ヤコブが年をとっての子どもだった^{かしら}ので、どの息子よりもヤコブからかわいがられた。それを、ルベンを頭とする10人の兄たちは嫉妬しヨセフを憎んでいた。兄たちが自分にひれ伏す夢を見たときヨセフが言ったとき、一層彼を憎むようになる。あるとき父から、羊を放牧させている兄たちを見に行くよう言われたヨセフがドタンの地で兄たちに追いついたとき、兄たちは弟を痛めつけようと考え、水の涸れた穴に彼を投げ込む。そして、ラクダに乗ったイシュマエル人の隊商にヨセフを売ろうと考えるが、そう考えているあいだに、ヨセフはミディアン人の商人に穴から引き上げられ、銀20枚でイシュマエル人に売られ、エジプトに連れていかれる。ヨセフを見失った兄たちは、落ちていたヨセフの着物を拾いヤギの血をつけると、父の所に持って行った。息子は死んだものと思い、父ヤコブは嘆き悲しんだ。一方、エジプトに連れてこられたヨセフは、ファラオの宮廷の侍従長ポティファルのものとなった。才覚があり美しいヨセフはポティファルに気に入られ出世していくが、ポティファルの妻に言い寄られ、それを断ったため、彼女の計略にはまり牢獄に入れられる。牢獄でヨセフがファラオの給仕役と料理役の夢をそれぞれの生と死として解き明かすと、それは現実のこととなる。そして、ファラオの夢——七頭の牛と七つの穂——を解釈すると、ファラオは感心しヨセフを宮廷の宰相にする。こうしてヨセフは権力者の地位に登る。ヨセフの夢判断どおり、大豊作のあと飢饉が始まった。それは世界各地に広がり、ヨセフの父ヤコブや兄たちが住むカナン地方もその例から漏れなかった。兄たちは穀物を買うためエジプトにやって来ると、穀物販売を監督するヨセフにひれ伏す。ヨセフは彼らが兄だと分かったが、彼らはヨセフに気づかなかった。結局兄たちは二度エジプトに来て、ヨセフから穀物を分け与えられる。そしてヨセフが彼らに自分の身を明かすと、兄たちは父ヤコブを連れてエジプトに戻ってくる。エジプトでヤコブ

は 147 歳まで生き、ヨセフは 110 歳で生涯を閉じた。

以上が『創世記』に描かれている「ヨセフの物語」である。

『戸惑う占い師』の主人公の名前はホセであるが、それはイスラム語名ヨセフのスペイン語名である。明らかにホセ・マリア・メリーノは、本作は「ヨセフの物語」をもとにした物語だと読者に分からせるような書き方をしている。主人公の名前は同じだし、構成は異なるものの、最後にはホセはヨセフと同じような生涯をたどっていたことがわかる。

しかし、決定的な相違点が 3 つある。1 つ目は、ヨセフはこの世の創造者＝神の末裔であるのに対し、ホセは人の子として生まれ、子孫を残す人間である、という点である。2 つ目は、ヨセフは夢を見るし正確な夢判断をするが、ホセは夢を見ることはない夢判断はいい加減な彼の勘によるものだ、という点である。ヨセフの夢判断が託宣であるのは、彼が神の末裔であるからであり、一方ホセは人の子であるため正確な夢判断はできないのだと思われる。そして 3 つ目の重要な相違点は、ホセの目はほとんど見えないということだ。目の不自由な男が夢を解釈することで、人間の不安な思いやこの世の謎を解いていく。隠れているこの世の謎を解き明かし判断するのが占い師であり、また、隠れたこの世の真実を言葉によって明らかにするのが文学者＝詩人であるとしたなら、目の不自由な年老いた占い師ホセは、家系的に幼い頃から眼疾を抱え、多読により晩年は半盲の状態となった詩人ボルヘスを彷彿とさせる。世界を解説する、盲目に近い老人という点で、ホセはボルヘス自身のようだ。

『戸惑う占い師』に描かれる世界もボルヘス的世界と言えらるだろう。最後にホセは夢を見て夢の本質を知り、自分は何者であるのか、人間とはどんなものであるのかを理解する。本作は、夢をとおして人間存在の謎に迫る作品と考えられるのである。

『戸惑う占い師』にはボルヘスの『創造者』の影響が見られると筆者は思う。『創造者』(岩波文庫、2009)の訳者である鼓直の手になる同書巻末の解説を援用しながら考察をこころみたい。

『創造者』とは、「1974 年の 8 月、メキシコの著名な雑誌『プルラル』」における対談で「できれば 5、6 ページ程度のものに全作品をつづめたいものだ」と言っていたほど「形式と内容のいずれの面でも、凝縮と洗練を厳しく心がけてきた」ボルヘスが、「わたし(ボルヘス：筆者注)の好みからいえば、おそらく最上の作品」と『ボルヘスとわたし——自撰短篇集』のほぼ 4 分の 1 を占める「自伝風エッセー」のなかで述べている、ボルヘスの代表的な著作である。『創造者』を、ボルヘスは「ボルヘスの《文学大全》と呼んだ批評家がいることも承知していたに違いない」と、鼓は言っている。

本作『戸惑う占い師』は、『創造者』のなかでも表題作「創造者」の影響が強いと筆者は思う。「創造者」に出てくる単語——arena「砂」、se estaba quedando ciego「視力が失われていく」、las borrosas cosas que lo rodeaban「まわりを取り囲む形のはっきりしない

もの」、puñal「短刀」、de heridas y de batallas「傷と格闘の」、sangrienta「血で汚れた」、hipogeo「地下の墓地」など——が『戸惑う占い師』に登場する単語と連関しているし、両作品とも最終的に絶対者の存在が暗示されているからである。

ここで「創造者」の内容を確認したい。

視力を失っていく、死を前にした男が過去を追想している。父がくれた青銅の短刀を使って自分を侮辱する少年と格闘した瞬間のことで、最初の女性の思い出だ。そのとき彼は悟る。この先も愛と危険は自分を待っていると。しかし、最後に、さらに先の究極の闇に降りていきながら彼が何を感じたかは分からない、と語り手は語って作品は終わる。

以上が「創造者」のあらすじである。「形式と内容のいずれの面でも、凝縮と洗練を厳しく心がけてきた」ボルヘスらしく、短い文章のなかに深遠な思想と詩的世界が表現されている。

鼓によると、「創造者とは」「生をことばに換える」のを仕事とする「《詩人》を指す」。詩人という創造者のひとりであるボルヘスにとって、「創造の行為」とは「世界の隠された企図の探測」であり、「一切の存在の真の形相の認識」であり、「それらの秘儀的な営みそのものの在りようの開示」である。「ボルヘスにとって世界は基本的にカオス」だ。そのカオスのなかで、人間は、「現実と夢、客体と主体の区別が無限の反復と照応のなかで失われていく」のを「辛うじて知覚」している。そのカオスとしての世界をボルヘスは捉えようとする。このため、「世界の創造者である神という存在に、ことばによるやはり1個の宇宙の創造者としての詩人はなぞらえられる」のである。「しかし結局のところ、そのような対比が不遜なおごりでしかない」ことが詩人には分かるときがある。そのとき、詩人は、創造者にはなれないことを思い知らされるのである。

ホセは人生の終わりで初めて夢を見たとき、夢の意味や人間存在の真理を悟った。自分は夢を解き明かすものではなく、自分も夢のなかの一員だということに気づいた。

人間は、他者の夢という人生を生きている。夢は鏡のようなものだ。互いが互いの夢を見ている。そして、すべては神という絶対者によって夢見られている。人間は「眠れる不死の人が見る夢のなかに蠢く束の間の形象」なのである。最後に「不死の人」という絶対者の存在が見えてくる。

この世や夢を解釈するものは、詩人であり占い師である。つまり、占い師も創造者になろうとする者だ。しかし、絶対者を前にしては誰も創造者にはなれないのだ。神こそ創造者であり、だれも神の代わりにはなれないのである。

ボルヘスの他の作品とは異なり、『創造者』には「彼の等身の影らしきものを認め、肉声めいたもの」や「わが身の衰残を哀しむ絶望と懊悩、悲嘆の声」が聞き届けられる、と鼓は言う。

「創造者」の主人公に、「衰残」に「絶望」し「懊悩」する半盲の詩人ボルヘスを見たホセ・マリア・メリーノは、ボルヘス的世界である『戸惑う占い師』においてボルヘス自身をホセとして造形することで、神の末裔であるヨセフのように創造者にはなれない詩人の苦悩をも描いているのである。

ホセ・マリア・メリーノは、1941年スペイン北西部の自治州ガリシアの港町ア・コルーニャに生まれ、幼い頃、隣接する州カスティーリャ・イ・レオンの古都レオンに移り住んだ。

マドリードで法学を学んだのち、彼は1972年詩人としてデビューしたが、*Novela de Andrés Choz* (1976)以来、小説家として多数の作品を発表している。*La orilla oscura* (1985)、*El centro del aire* (1991)、*Las visiones de Lucrecia* (1996)、*Los invisibles* (2000)、*El heredero* (2003)、*La sima* (2009)、*Musa Décima* (2016)などである。ミゲル・デリーベス文学賞(1996)やラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ文学賞(2004)など受賞した文学賞は数多い。2008年、スペイン王立アカデミーの会員に選出された。さらに2013年、*El río del Edén* (2012)で国民文学賞を受賞した。そして2021年、作家たちの権利や発展を守る活動に対し、CEDRO賞がメリーノに送られた。(CEDROはCentro Español de Derechos Reprográficosの略語)

ここに訳出したのは、José María Merino, *El anillo judío y otros cuentos*, Castilla Ediciones, Valladolid, 2005所収の短編13編中の1編“El adivino confuso”である。

